THE TRANSACTIONS OF THE INSTITUTE OF ELECTRONICS, INFORMATION AND COMMUNICATION ENGINEERS A
電子情報通信学会論文誌　基礎・境界 A　第 453 号　平成 17 年 9 月 1 日 発行　付録

基礎･境界 ソサイエティ
ニューズレター
September 2005 No.54
The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers

ソサイエティ会長に就任して

築山 修治 (中央大学)

中村勝洋会長の後を受け，平成 17 年度ソサイエティ会長を務めさせて頂くことになりました．皆様のご支援・ご鞭撻をよろしくお願いします．慣例に従い，所感を述べさせて頂きます．

ソサイエティ制が発足して 10 年が経過し，ソサイエティ独立採算化に向けて学会が動いており，通信ソサイエティではその試行を本年度より開始しました．これは，ソサイエティが財政的にも完全独立して活動しようという試みです．しかし，ソサイエティは何の為に独立するのでしょう．これは，常に全体が同一規準で動けという制約が課せられると，各ソサイエティの特色ある活動が制限され，学会全体の活性化が阻害されるという了解に基づいて出てきた localization の一つです．本学会の担当分野が広がり，大学会になったにも関わらず，学会全体が一つであった時に生じた問題点を解決するために生まれたソサイエティ制ですから，この了解は間違いではないのでしょう．

しかし，この了解が常に真か，globalize された学会内でも各ソサイエティが自由に活動できるようなシステムはできないのかという問題は，globalization の中での localization として興味のあるところです．なぜなら，本ソサイエティは，学会がソサイエティ制に移行せざるを得なかった状態をそのまま引き継いでいるソサイエティだからです．昨年度，本ソサイエティの意思決定ルールが策定され，代議員制度ができましたが，その議論の際も，ソサイエティとしての意志決定を素早くできるようにしたいという要請と各研究会やサブソサイエティの独立性を保ちたいという要請との兼ね合

目次　ソサイエティ会長に就任して ＜築山修治 (中央大学) ＞ ……1
20回記念 ITC-CSCC 2005 に参加して ＜杉野暢彦 (東京工業大学) ＞ ……3

いが問題となりました．この議論において原則としたことは，少数意見を尊重する体制を保持しなければ，本ソサイエティの使命を達成できないだろうということでした．

ご存知のように，本ソサイエティには，論文誌発行がソサイエティの条件だという制約から，ソサイエティにはなれなかった様々な集団があり，サブソサイエティを構成している集団が担当する基礎的分野や，その他の集団が担当する境界分野があります．これらの基礎的あるいは境界領域は学会の新しい研究領域を創生する重要な分野とみられており，この新分野の開拓・育成が本ソサイエティの使命と考えられています．ソサイエティ制に移行したにも関わらず，学会が抱えていた問題をそのまま受け継いでしまった本ソサイエティは，学会が持つべき必須の機能も同時に託されたと言えます．

では，10 年経って，本ソサイエティは新分野の開拓・育成をしたのでしょうか．サブソサイエティはソサイエティになれるのでしょうか．時限研究専門委員会でだけでなく，2004 年度には，次世代情報メディアシステムを研究対象としたスマートインフォメディアシステム研究専門委員会も発足しましたので，数が多くはありませんが，新設の努力は続いています．このような新分野の創生には今後も積極的な支援も行いたいと思いますが，研究会の新設がし易くなっていると同時に，その改廃もし易くなっている必要があります．それには，研究会が沈滞化していないか，新しい参加者の加入があるかなど定期的に点検する機能も必要となります．

ソサイエティは，同好の士がお互い切磋琢磨する場で，それを核に仲間を広げて行く活動や，社会へ恩恵を還元する活動を，ボランティアベースで行うところだと考えれば，その場を価値ある物にするためにすべきことは幾つもあります．例えば，切磋琢磨するやり方の一つとしてソサイエティ論文賞を創設する，新分野を産出すために異分野の人を招いてチュートリアルを開催する，新たな仲間作りの一つとしての留学生向けサービスを充実する，ボランティアをし易くするための情報化を整備し，ボランティアに敬意と感謝を表するなどが考えられ，この内幾つかは現在進行中です．私の固定化した頭では限りがありますが，会員諸氏のお力が得られれば，やるべきことはまだまだ出てくるでしょう．

このような活動や新分野への財政的支援を行うには，ソサイエティ財政に余裕が必要です．ソサイエティ支出の主たるものが論文誌発行経費で，会員数に比してこの経費が大きいというのが本ソサイエティの特徴です．これに加え，会員数も減少している（前年度は 2% 弱減）ため，ソサイエティ財政の見直しと会員増強は不可欠で，これを昨年度に引き続き行なっています．

しかし，次年度よりオンラインジャーナル化が始まるため，論文誌発行経費が削減されれば，赤字予算も解消し，新しい展開の可能性があり，サブソサイエティがソサイエティに成れるかもしれません．さらに，ソサイエティが国際会議や講習会を開催した際に出た剰余金を積極的に利用する方策が確立すれば，もっと様々な活動が可能となります．

坂庭好一次期ソサイエティ会長および活性化ワーキンググループリーダをお願いした大石進一事業担当副会長は，どちらも学会運営に関する豊富な経験をお持ちの方ですので，協力してオンラインジャーナル化後の展開を考えて行きたいと思います．皆様のご協力をお願いします．

20 回記念 ITC-CSCC 2005 に参加して

杉野暢彦 （東京工業大学）

ITC-CSCC (International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications: 回路とシステム､コンピュータと通信に関する国際技術会議)は今回で 20 回目を迎える。本年（２００５年）は風光明媚な韓国・済州島（チェジュド）の新羅ホテルにて２００５年７月４日（月）～７日（木）の４日間にわたってとり行われた。

1986 年秋にソウルで JTC-CS(Joint Technical Conference on Circuits and Systems)が韓国と日本の研究者の交流の場として始まり、その後コンピュータ及び通信関連技術を含めて JTC-CSCC と拡大し、毎年日本と韓国持ち回りで開催してきた。その後、1996 年に国際会議 ITC-CSCC として発展し、日韓以外にタイ国でも開催されるようになり、徐々に国際会議となってきた。最近では、ASEAN 周辺各国からの参加者も増えつつある。

写真１　ITC-CSCC2005 会場となった新羅ホテルとその周辺（すぐ背後に山と海,）

済州島は日本の福岡からほぼ西に少しいったところにある。島中いたるところで道祖神がやさしく出向かえてくれる。過去にも韓国・済州島で行われたこともあったとのことであるが、その時は真冬のため雪だったとのことである。今回は初夏の済州島、時折梅雨（韓国で梅雨といっているかどうかはわからないが）末期ということもあり、時折スコールのような雨、そして強い日差しが差し込むというやや不安定な天候の中ではあった。ちょうど、韓流ブームにのって、日本人観光客の姿も見られた。ガイドブックなどによれば、済州島のこの地区は高級リゾート地となっており、韓国ドラマや映画のロケにもよく使われているそうである。

さて、当国際会議に話を戻そう。今回は論文募集や準備ががやや遅れてスタートしたため、随分といろいろな方々にご心配をおかけしたようである。それでも蓋をあけてみると、総投稿数 938 件の中の 884 件（招待講演 11 を含む）が採録され、これらが、３日間７２のセッション（口頭発表６３セッション、ポスター９セッション）に分かれて発表された。口頭発表の中には、非同期回路とシステムについての特別セッション（１セッション）もあった。また、今回、初めての試みとして、一般投稿論文の中で特に優れた 11 件については招待講演（Session Invited Talk）として、各セッションの中で時間を長めにとってご講演頂いた。前述のようなあいにく（？）の天気のため、これだけの並列数に分かれても各会場とも聴講者もそれなりにあり、白熱した議論が展開される一幕もあったようである。

一方で、やや残念であるが、ビザ取得の関係で参加できなかった発表者もあったようで、発表総数は 718 件（非公式，招待講演 11 を含む）であった。

また、参加者数９００名以上（公式には未発表）と過去最大規模となった。参加の大半は韓国、日本、タイからであったが、他に台湾、インド、シンガポールなどからの参加者もあったようである。

会議では、まず、今回の２０回記念を祝って、５日に行われたオープニング・セレモニーでは、慶応大学中川正雄先生、キングモンクット工科大学ラカバン校の Monai Krairiksh 先生、中央大学築山修治先生の３名の方々から２０回開催の祝辞があった。更に、６日に行われた懇親会ではこれまで JTC-CS の設立から JTC-CSCC, ITC-CSCC への発展にご尽力頂いた Dr. In Chil Lim, Dr. Tae Won Rhee,Prof. Seung Hong Hong, Dr. Kyu Tae Park, Prof. Sung Han Park,渡部 和先生，白川 功先生，篠田 庄司先生，後藤 敏先生に特別賞（アワード）が授与された（写真２）。

写真２ 特別賞表彰式

写真３ 渡部和先生のスピーチとそのスライド

その後、渡部和先生と Dr. Kyu Tae Park からのお言葉を頂いた。渡部和先生からは、まず、JTC-CS, JTC-CSCC として始まったこの会議の原点をご説明頂いた。そして「What to research And How to proceed it in R&D of CAS」という題目で先生ご自身が企業戦士及び大学教員として半世紀にわたり研究の第一線に関わってきた経験を元に研究に対する姿勢や研究テーマの選び方など我々研究者個人個人に向けた暖かくそして厳しい激励の言葉を頂いた（写真３）。渡部先生の講演についての資料（スライド）は ITC-CSCC ホームページ http://www.itc-cscc.org に掲載されている。ご興味のある方は是非そちらをご覧頂きたい。当ページは 1996 年以降の同会議についての記録（リンク）にもなっている。

当会議で恒例となっている特別招待講演は、２日目（５日）のオープニングセレモニー直後には、KDDI 研究所の平田康夫様による「ユビキタス・ネットワーク社会に向けての移動体通信の進化(Evolution of Mobile Communication toward Ubiquitous Network Society)」そして、３日目（６日）午前には Pohang 理工学大学の Hong June Park 先生による「2.4GHz WPAN 受信機のための低電力高周波 CMOS 回路技術 (Low Power RF CMOS Circuit Techniques for 2.4GHz WPAN Receivers)」及び Soongsil 大学の Yoan Shin 先生による「3G 標準ロードマップを超えて(Beyond 3G Standards Roadmap)」と合計３件の講演があり、いずれも現在ホットな話題に会場はほぼ満席となり、質疑も白熱した。

最後に、これだけの大規模となったが、会議自体の運営は何とか滞りなく行われたのは、ひとえに実行委員会及びプログラム委員会の委員の皆様のご尽力の賜物であると思う。この紙面をお借りして改めて厚く感謝の意を代表して述べておきたい。特に、首都大学東京の貴家仁志先生、西川清史先生には TPC の日本側代表として大変ご尽力頂いたそうである。また、基礎境界の CAS,SIP,NLP,VLD の各研究会の皆様にも様々に一方ならぬご協力頂いている。ご尽力に深く感謝したい。

次回、２００６年は７月にタイの古都チェンマイでの開催となる。皆様ふるっての御参加と、引き続き当会議への暖かい御支援を賜りますようお願い申し上げ、末筆とさせて頂く。